

文部科学大臣賞



この先どんなことがあっても

山本 彩佳（神奈川県・中学校1年）

澄み切った青空、体中から出る汗、みんなの声援。私は、当時小学2年生。運動会のこの日を私は今でもはっきりと覚えている。それは、私がひとりで走った最後の日だったからだ。

私は、小学3年生の夏休みに病院で、ミオパチーという筋肉の少ない病気だと診断された。「10万人に1人の難病で治療薬はない。この先歩けなくなるかもしれない」と言われた時は、頭が真っ白になった。それから3年半が経った。幸いなことに、私は病状が軽かったので、歩くことはできる。しかし、走ることはできなくなってしまった。その時は、すごくショックだった。小さい時からみんなより走るのは遅かったが、走る時の向かい風の、なんとも言えない気持ち良さが大好きだったからだ。走れなくなったら、あの向かい風はもう二度と味わえないと思うと、胸がしめつけられる思いで、どうにもならないもどかしさと胸苦しさを感じた。

ある日の夜のこと、私は両親に呼ばれ、リビングに行った。すると、父も母もスポーツウェアを着ていた。そして、母がにこにこして、「いい提案があるの。外に出て。」と言われ、不思議に思いながら、玄関を出た。すると、両親に両脇を抱えられた。「いくよ！足を動かして。」2人は、私を抱えて走った。体が宙に浮いた。必死で足を前に出した。3人で走ると、1人で走る時とは違うが、それでもあの向かい風の感触を思い出すことができた。小学2年生の運動会の感動が私の胸によみがえってきた。夜空の星も、ひんやりとする夜風も、あの時とは違っていたが、心のときめきや何とも言えないわくわく感は同じだった。こうして、今でも私は走っている。両親の力を借りて、風の感触をほんの少し取り戻すことができた。

今の私は、平たんな道は、ゆっくりだが1人で歩くことができる。しかし、立ち上がるとき、段差のあるところを上る時などは、手助けが必要となる。そういう時、両親はいつも何気なく自然に手を貸してくれる。また時には、私に自立心をつけるために、あえて手を出さないこともある。それは私にとって、大変なことであっても、今ある筋肉を衰えさせないための両親の心遣いであることが分かるので、自分でやろうと頑張っている。そうやって、出来ることをひとつずつ増やしていきたいと思っている。

昔は当たり前のように走っていた私。それが、今は1人では走れない。今、当たり前のように歩いている私。当たり前のように勉強している私。当たり前のようにやっていることが、いつか出来なくなってしまうかもしれない。だからこそ、私は今できることに感謝しようと思う。もし、出来なくなったら、その時は悲しいかもしれないが、その悲しみを乗り越えたら、その先にまた新しい楽しみを見つけられると思う。

これまで、私はみんなに心配をかけないようにと思って、嫌な事も悲しい事も、あまり顔に出さないようにしてきた。そして、自分の中でひとつひとつ物事を処理して、乗り越えてきたつもりだった。しかし、思い返してみると、それは周りの人の温かい支えがあったからだ。これからも何かにつまずく時、壁に突き当たる時はあるだろう。その時は、3人で走ったあの夜を思い出したい。それは、私の心の支えとなり、新しい力を生む源になると思う。

SYD理事長賞



「ちょボラマスター」は私のほこり

口町 日向子（茨城県・小学校5年）

よーし、今日も「ちょボラ」をがんばるぞ。

毎朝、学校に近づくと、私の心の中が燃えてくる。私が今、1番がんばっていること、夢中になっていること、そして、自信をもってみんなに言えること。それは、小学校の「ちょボラ活動」に取り組んでいることだ。「ちょボラ活動」とは、「ちょこっとボランティア活動」のこと。生き物のお世話や学校のはきそうじ、あいさつ運動など。人のために、みんなのために、学校のためにちょっとだけできるボランティア活動をすること。それが「ちょボラ」。私の通う岩瀬小学校では、去年からこの「ちょボラ活動」がスタートした。「ちょボラ活動」をした人は先生からシールがもらえるシステムになっている。1回の「ちょボラ」でもらえるシールは1つ。「ちょボラシール2倍デー」の週も時々ある。「ちょボラシール」30個で「ちょボラカード」が満たんになる。その「ちょボラカード」が5枚集まると、「ちょボラマスター」に認定され、「ちょボラマスター」の称号としてのバッヂが与えられる。私は4年生の3月に「ちょボラマスター」に初めて認定された。そして、もうすぐ4回目の「ちょボラマスター」に認定されそうだ。

私の初めての「ちょボラ」は4年生の時だった。小学校の「ちょボラ活動」スタートの初日から私は「ちょボラ」に参加した。朝、校庭のはきそうじをした。登校してすぐにランドセルを置き、竹ぼうきをもって桜の木の下に向かった。桜の花びらをはいている先生の後に続いて、私も夢中ではいていった。ピンク色の地面がどんどんきれいになっていった。15分という短い時間だったが、とてもきれいになった。はき終わった地面を見て、とっても気持ちがよかったのを覚えている。初日の「ちょボラ」メンバーは少なかった。

私は、あれからずっと「ちょボラ」を続けている。体調の悪かった日以外は、毎日、毎日「ちょボラ」を続けた。雨で校庭のはきそうじができない時には、しょうこう口や、ろう下のはきそうじやぞうきんがけをした。はきそうじの他にもいろいろな「ちょボラ」をやってみた。下校中に通学路のゴミ拾いをしたり、登校後にあいさつ運動に参加したり、休み時間にうさぎにえさをあげたりした。今では、先生がいなくても自分から進んで「ちょボラ」に取り組んでいる。竹ぼうきがなくなるくらいに「ちょボラ」メンバーも増えた。

私が「ちょボラ」を続ける理由は、3つ。学校がきれいになるから。みんなとやるのが楽しいから。そして、私には「ちょボラマスター」としてのほこりがあるから。責任を感じてやらなければという気持ちになる。正直、「ちょボラ」が大変だなと思う時もあるが、ピンク色の地面がきれいになったあの初日の気持ちを思い出すと、これからも「ちょボラ活動」をがんばるぞという力がわいてくる。



優秀賞



私の一生の財産

飯野 理子（東京都・高校1年）

今年の夏のあのフィリピンでの経験は私の一生の財産です。

まず、このような経験をさせてくださった両親やSYDの皆様にお礼をしたいです。

最初、このボランティアに応募した理由は、新しい世界を知ることでした。私は、小学校の頃から今の中高まで同じ学校で周りの環境も小学校の頃からさほど変わらず、今まで生きてきました。そんな環境で高校生になって自分の将来を考えた今、自分が何をしたいのか。自分は何をしてきたのか分からなくなって、自分の存在意義すら分からなくなっていました。

そんな世間知らずの私がフィリピンに行って見た光景は、すべてが新鮮で毎日が驚きで溢れていました。時には今まで感じたことのない様々な感情にかられ、うちのめされたりもしました。

フィリピンでたくさんの人に出会い、触れ合ったなかで、フィリピンの人たちはみんな、毎日を全力で生きています。そのなかでたくさんの小さな幸せを見つけ生きていることを感じました。子どもたちもお母さんもみんな顔から「生きている」というエネルギーがみなぎっていました。じゃあ自分は？と考えてみたら、落ち込みました。この16年間私はずっと周りが用意してくれたレールの上を歩き続けています。物欲にまみれ、大きな幸せを追うことに必死で、周りにあったはずの小さな幸せを見つけられず追ってたはずの大きな幸せも見失ってしまっていた気がします。ただただ生きているというか、なすがままに突っ立つだけな気がしました。それだけで生きていけたからです。

私はよくフィリピンの子どもたちに将来の夢の話を聞きました。どの子もみんな夢がありました。たくさんの大きな夢。歌手やニュースキャスター、ダンサー、船乗り。あなたは？と子どもたちに聞き返された時、何も返せない自分が本当に情けなく思いました。私より幾つも歳下の子が、家族の幸せを思いそれを夢にしてるのに、自分にとっての幸せは、いい大学に行って、いい就職先で働いて、いい夫を見つけて…というのが幸せだと思っていました。そういう風に私は周りの大人たちに教わっていました。でも違う。フィリピンに行って、私は自分のやりたいこと、「生きてる」と感じられることをやっていきたいと思うようになりました。“自分の1回しかない人生をどれだけ全力で毎日を生きたか”、が本当の幸せや豊かさの形なんじゃないかなと思えるようになりました。また同時に夢を話してくれたフィリピンの子どもたちが、貧困を理由に夢を諦めることがないように支援していきたいと思いました。

また、このボランティアを終えて日本に帰ると、お店に行っても、店員さんと1回も目が合わないし、街中でもみんな仏頂面で人にぶつかってそのまま歩く。友達と一緒にさえもスマホに夢中になったり、人のことを羨み悪く話したり…、これまで普通に送っていた日常に疑問を抱き始めましたし、早くも帰ってきてその日常に染まってしまっている自分が嫌になったりもしています。日本は優しくおもてなしの国だと評価されています。でも本当にそうでしょうか、みんな自分のことに精一杯で自分さえよければと考えていないでしょうか？目線を合わせたコミュニケーションが日本はできていないなと思います。伝え合って、寄り添い合って、思いやりをたくさんもらったフィリピンがとても懐かしく思います。帰ってから日本の貧困について調べてみると、日本にも貧困の子どもが見えにくいだけで6人に1人いるそうです。衝撃でした。日本ももっと貧困を重視するべきだと思いました。

またフィリピンでの出来事を伝えることにも苦労しています。フィリピンの出来事を伝えるときに、どうしても写真だけだと「かわいそう」といった印象になってしまいます。ごみ山の写真やそこで暮らす子どもたちの写真を見せると、みんな口々にかわいそうだねと言います。でも私が伝えたいのは貧困の現状ももちろんですが、そこで元気に暮らして生きている人たちがいる。むしろそこで私たちが学ぶべきこと、私たちが持っていないものがたくさんあったことを知ってほしいです。

フィリピンに行ってから半年近く経ちました。夢も見つかり、それに向かって頑張っています。やりたいことを全力でやり、「生きている」って思えてそれが力になるからです。私が今、伝えたいことは、若い私たちには無限の可能性があり、今の決断と、努力次第で「なんにでもなれる」ということです。

私たちは恵まれています。だからこそ将来に安全な道が確保されているし、当たり前だと考えてしまいますが。でも恵まれているからこそ「夢に没頭することができる環境」が作れるということも気づいてほしいです。もし今、将来が見えなくて悩んでいる人がいたら、まず自分がやりたいことを見つけて、それが何であっても、挑戦してほしい。だめだったって若い私たちなら、いくらでもやり直せるから。それでも将来に不安を感じたら、ぜひフィリピンに行ってみて下さい。きっと何か見つかると思います。

優秀賞



いのち輝かせて

渡邊 佳緒里（北海道・高校3年）

私の左手首には未だに消えないリストカットの跡がある。小学生の頃からの壮絶ないじめ。そのうち無くなるだろうとひたすら耐えていたが、6年生になってもひどくなる一方で、とうとう学校に行くのを止めた。

家庭環境が小学校1年生の時に変わって、私は母と兄の3人で暮らすようになった。その頃から何かに救いを求めるように必死で自分の居場所を探した。自分に自信が持てず、人と接することも苦手で何かに怯える私は周囲にとって恰好のいじめの対象だったのかもしれない。教室に入ってから放課後までひたすらいじめてくるクラスメイトたち。ついには「死ね」と言われるようになり、死ねと言われたんだし死んだっていいやと自暴自棄になった。そんな毎日は中学生になっても変わらなかった。「いじめ」という単語を聞くだけで怯える日々。そして3年生になった時、私の問題行動が始まった。母親と対立するようになり、学校で警察沙汰になるようなこともしてしまった。すべては自分のせいだと分かっていても、周りの大人たちは私の行動の根底にあるものにフタをしたがり、無関心であるように感じ、その思いがさらに自傷行為や攻撃性へと走らせた。そんな中でも高校は何とか地元の公立高校に受かり、新しいことを始めようと剣道部に入部した。しかし、しばらく経つと、また自傷行為が頻繁になり、自分も周りも傷つけ続けた私は、とうとう退学処分になってしまった。

それでもなんとか高校だけは卒業したいと思い、見つけたのが現在通っている北星余市高校だ。学校の第一印象は超最悪だった。個性豊かな人たちがいっぱいいて、こんなところで残りの高校生活をおくるのかと思うと初めから後ろ向きになってしまった。そんなとき、ある先生に「お前、ボランティア行ってみろよ」と言られた。私は人のために働くのが嫌いだ。ボランティアに率先して行く人も嫌いだ。なんで私がそんな面倒くさいことをやらないといけないの?という気持ちだったが、とりあえず一度だけは参加することにした。初めてのボランティアは「北海道ソーラン祭り」で障がいを持つ子どもたちと着ぐるみを着て山車(だし)をおしながら町内を回るというものだった。面倒くさいし恥ずかしかったが、終わってみると達成感と周りからの「ありがとう」という言葉にやりがいと何か温かいものを感じた。それから少しづつボランティアに関わるようになった。そしてボランティアに参加すればするほど、自分の心が満たされていくのを感じ始めていた。

その後、SYDの「ボランティア・アクション in 福島」に参加することになった。ボランティアに慣れてきたとはいえ、5泊6日の長い日程だし、ギリギリまで迷ったが、勇気を出して飛び込んでみた。そのプログラムの中では、東日本大震災で被災した方々への炊き出し活動があり、仮設住宅での炊き出しの前には、津波で多くの犠牲者を出した場所にも行った。生きてても生きられなかつた人々の「いのち」の欠片がある場所、そして仮設住宅の人々の多くは、愛する人を失ったのにそれでも残された自分自身を精いっぱい生きよう、と覚悟を決めた人たちだった。私が何度も何度も捨てようとした自分の「いのち」は、その人たちが心から慈しみ、もう一度会いたいと涙し、つらくとも生き抜くと誓った「いのち」だった。仮設住宅で食事を提供した時には「ありがとう」と優しく声を掛けられたが私は「生きててくれてありがとう」と言わされたように思えた。生きていたからこそたくさんの人に出会うことができたと思った。ボランティアに参加することで「いのち」がふれ合う瞬間を何度も感じることができた。

私は、あんなに嫌いだった人とのつながりやふれ合いを深めていきたい、と思うようになった。そして今まで自分のためにしか使ってこなかった時間を誰かのために使おうと決めた。

私は、もうすぐ大好きな北星余市高校を卒業する。この学校で学んだことは一生の宝物だ。私は人によって傷つけられたが、人によって救われました。19年間生きてこられたのは親をはじめ、たくさんの方々の支えがあったからだと今は強く思える。これからも、「誰かのために」という気持ちを忘れずに、与えられた「いのち」を私らしく輝かせて生きていきます。

優秀賞



心音を刻む「言葉」

緑川 沙智（栃木県・大学4年）

東日本大震災が、私の心に新たな息吹をそっと吹き込んだ。

当時、高校1年生だった私は、地元の福島県で被災した。ちょうど家族と出かけていた矢先に、あの地面を突き上げるような巨大地震が襲い、一瞬にして、日常の時の流れが止まってしまった…。

震災時の過度な危機感が解け、「命が助かった」と安堵に包まれる一方で、地震と、津波と、福島第一原子力発電所事故と…、次々と迫りくる脅威によって変わり果てていく故郷の「福島」の姿をテレビ越しに見るたびに、やり場のない想いが募っていました。私の命は救われたけれど、東日本大震災への静かな怒りと恐怖と悲しみに、心の傷は無意識のうちに深くなっていく…それが当時の私の「被災」だった。

そんな「被災者」という殻に覆われた私に温かな陽を差し込んでくれたのが、進学先で出会った「福島学」という学問だった。この学問では、原発事故後、放射能汚染と風評被害に直面している農家の方々とともに、愛情を注いで育てた野菜や果物の安全性をどのように発信することができるかという観点から商品開発に取り組んだ。この活動のなかで、はじめて被災者の心底にある深い悲しみと怒りに触れたとき、テレビを通して受けた私の間接的な「被災」と農家の方々の直接的な「被災」が現実のものとなって繋がり、涙が溢れ出した。そんなとき、農家の方々が、私たち学生に温かな詩をプレゼントしてくれた。

その詩は、この言葉から始まる。

「あきらめないことにしたの」

これは、心に潜む悲しみや怒りと何度も対話を重ねてきたからこそ、紡ぎだせた言葉。この想いを受け取ったとき、私の冷え切った心に温かな息吹が吹き抜けた、そんな感覚が全身を巡った。この出会いが、私を「被災者」から「協働者」へと成長させてくれたのだ。

東日本大震災での心の変化をきっかけに、私は関東・東北豪雨をはじめ、熊本地震や台風10号での災害ボランティアや復興支援に携わってきた。そのなかで、新しい出会いや学びを得るだけでなく、震災を通して生まれた多彩な「生き方」に触れさせて頂いた。そこには、失ったものと真摯に向き合い、懸命に闘い続けようとしている人々。震災から得た新たな気づきを自分の人生や地域に落とし込み、再スタートを切っている人々など、十人十色の「生き方」が色づいていた。

農家の方々から頂いた生氣を帯びたあの「言葉」が、私に変わるべききっかけや勇気を与え、震災のなかで多彩な「生き方」を歩む人々と巡り会わせてくれた。この出会いから「生きる力」を頂いている私が、これから恩返しできること。それは、震災からの十人十色の「生き方」を言葉で紡ぎ、「今、生きる力を貰いたい」と震災と懸命に向き合い、一步踏み出そうとしている人々へ、そして、もうこれ以上、助かった命が絶たれてしまわぬように、微力ながら「生きる力」を皆さんにそっとプレゼントしていきたいと思い、私は震災と生きる人々の姿を言葉に紡ぎ、発信している。震災後の教訓を伝えていくだけでなく、震災の中で人はどのような生き方を歩んでいるのかを残し、伝え続けていくことが復興への第一歩に繋がると思う。だから私は、東日本大震災と真摯に向き合い、寄り添いながら力強く生きていく。私の「生き方」が、誰かの「生きる力」に繋がるように願いを込めて。